

[科目区分] 大学院：専攻共通基礎科目

[授業科目名]：生徒指導・進路指導の実践研究

[登録学生数]：10

令和3年度「授業評価・授業研究報告」

教育学研究科 城戸 茂

1 授業の目標及び内容

本講座は、教育実践高度化専攻の共通基礎科目として、1回生を対象に実施したものである。なお、集中講義として実施する本講座では、その利点を生かし実践的指導力についての理解を深めることを目的に、生徒指導の本質を垣間見ることが期待できる生徒指導関連施設の訪問を位置付けている。

本講座の目標は、①生徒指導及び進路指導の現状と課題についてエビデンスを基に理解すること、②生徒指導・進路指導に当たる若年教員への指導・助言の観点を示すことができることの2点とした。

また、中核的なDPとして、「3. 学校経営や教育実践をめぐる現代的諸課題について、幅広く専門的な知見をもとに、その対応方を適切に考え、高度な実践力をもって学校経営・教育活動に取り組むことができる〔思考・判断・表現〕」及び「4. 学校に対する社会のニーズと自己の学習課題・研究課題を明確に意識し、実践を省察しつつ先導的に学習し研究する高度な教育実践力をもった専門的職業人として、自己の使命と責任とを自覚し、自主的に社会に貢献しようとする〔関心・意欲・態度〕」を掲げて取り組んだ。

授業内容の概要はシラバスに示したとおりであるが、生徒指導・進路指導に関する各種データを基に取り組むべき課題を考察し、その改善に向け、関係機関や専門家等との連携を図りながら学校全体で組織的に取り組んでいくための方策について具体的事例を織り交ぜながら検討していくことを中心に構成した。

授業形態は、最新の学術成果について講義形式で学ぶ部分と、学校現場で話題になることが多いいじめや不登校、反社会的行動に関する事例を基に、学部時代や学校現場で身に付けた知見を活用してディスカッションする場を効果的に位置付ける構成を基本とした。さらに、まとまった時間を確保することができるという集中講義の利点を生かし、児童虐待の増加に伴い注目が高まっている児童相談

所や、少年非行の質的变化等に伴い入所者が減少傾向にある少年院を訪問し、生徒指導や進路指導上の困難を抱える児童生徒に対する関わり方について職員の体験談を聞いたり、様々な意図をもって設計されている施設を見学させていただいたりするなど、実践的な学習に力を入れた。

2 授業評価

次ページの表は、最終回の授業の中で実施したDPに対応したアンケート結果の一部である。本調査結果を手掛かりに本授業を振り返ると、次のような成果と課題を挙げることができる。

まず、成果として次の2点を挙げることができる。1点目は、本講座で学んだ知識やこれまでの学習や教職経験で身に付けた知識を活用し、事例や訪問見学での学びを深めている様子が見えがえることである。例えば、整理番号1の学生では、これまでの学級担任経験を通して獲得した経験知と本講座での学びを関連付けながら、生徒指導の本質的な理解に至っている様子が見えがえる。また、整理番号2～4の学生は、本講座の中で学んだ生徒指導の本質に関わる知識を、施設訪問での観察や施設職員の講話を通して理解を一層深めている様子が見えがえる。これらのことから、本講座では〔思考・判断・表現〕に関する能力育成において、大きな成果があったことが見えがえる。

2点目は、多くの学生が本講座で学んだ生徒指導・進路指導に関する知見を踏まえ、学んだことの実践を指向していることである。例えば、整理番号1・2の学生は、講座で学んだ生徒指導の基礎・基本を大切にしたい取組の重要性を施設訪問での観察や講話を通して理解したことにより、学校現場での実践を意識した記述がみられる。このことから、〔関心・意欲・態度〕に関する能力についてもおおむね達成したと判断することができる。

一方、課題としては、評価方法の不十分さ

が残る点である。自由記述だけにしたことから評価の曖昧さが残った。今後、複数の評価方法を組み合わせるなど、より適切な評価方法を検討していきたい。

以上、本講座においては、設定したねらいがおおむね達成できたと見ることができるところから、授業設計についてはおおむね適切であったと考える。次年度は、評価方法を再検討した上で、より質の高い講座にしたい。

3 実践的指導力の育成を目指す取組について

本講座は、主として生徒指導・進路指導に関する具体的事例や、生徒指導に関する力量を備えた職員が働く施設見学を通して、生徒指導・進路指導の本質について考えることを通じて実践的指導力の向上を図ることを目指した。そこで、学生の実態を踏まえ、生徒指導・進路指導に関する基本的な事項や現状と課題をデータを基に学んだ後、具体的事例を基にディスカッションすることを通して、理解を深めるとともに、施設訪問を行い生徒指導の本質を踏まえた実践に触れることにより、一人一人の学生の学校現場での実践意欲を高めることができるよう意図的に授業設計を行った。こうした成果の一端は、表で示したアンケート結果に見ることができる。

教員養成の場においては、授業で学んだことが将来の教壇での実践につながることを意図して実施することが大切であり、教職大学院においてはその質も問われるところである。

ストレートマスターはもちろんのこと、一定の現場経験のある現職教員にとっても価値ある学びの場となるよう、資料や文献だけでなく、ディスカッションを通して多様な他者と学び合う場や、現場訪問の機会を保障することで、学校現場で役立つ実践的指導力の育成を目指したい。

4 今後の課題

本年度の取組を踏まえ、次年度に向けての検討課題として次の3点を挙げるができる。

1点目は、DPとの対応を図ったシラバスと個々の授業設計の精度を一層高めるとともに、評価方法の改善を図ることである。その際、将来、ストレートマスターが教壇に立つ場面を意識するとともに、現職教員にとって一定の質の高さを保障できるよう内容の構成や学習形態等の更なる工夫を図りたい。

2点目は、理論と実践の往還が求められる教職大学院においては、知識の習得と知識の活用を通じた能力育成の両面を重視しながら取組の質を意識的に高めていくことである。

3点目は、コロナ禍の中での授業対応が今後もしばらく継続することが予想される中、実践的指導力を育むうえで現場訪問から学ぶことの意義は大きなものがあることから、施設訪問の機会の保障の在り方を検討することである。

次年度は、特にこの3点について重点的に取り組みたい。

〔表〕アンケート結果〔抜粋〕

1	少年院に入る子供の特徴として認知機能・想像力・対人スキルが弱く、固定観念が強くすぐに切れる、自己評価が不適切といったことが示されていた。クラスの中でもこうした児童は少なからず存在する。事実、卒業生の中にも少年院に入った子供もいる。日々の生徒指導の中で、自己存在感を与えることを大切にしたい取り組みの重要性を感じた。教育現場に復帰した際には、本講座での学びを大切にしたい実践を心がけたい。
2	大きな困難を抱える子供たちと日々関わっている職員の方のお話の中に、「子供の心のノブは内側にしかない」という言葉があった。この度の施設見学や職員の方の講話を通して、子供の主体性を尊重した取組の重要性を認識するとともに、主体性を引き出すことを可能にする生徒指導の基盤は、やはり児童生徒理解に尽きるということを改めて実感した。在籍校に戻った後には、生徒指導の基本に立ち返った取組を実践したい。
3	この度の施設見学や職員の方々の話を通して、関係機関と連携することの意味や意義が分かった。また、連携するとは任せっきりにするのではなく、学校としてやるべきことがあることを具体的に理解することができた。
4	施設訪問や職員の方のお話を伺うことを通じて、お互いを知ることの重要性を感じることができた。学校と関係機関との連携とは、詰まるところ人と人との連携であることを実感を持って理解することができた。